

「エコハウス推進シンポジウム」の報告

1 開催趣旨

地球環境保全のため、高度な省エネルギー技術の普及・促進が急がれており、各方面で様々な取組みが行なわれています。とりわけ岩手県紫波町では平成12年から「一紫波の環境を100年後の子どもたちによりよい姿で残し伝えていく―新世紀未来宣言」を行ない、「循環型まちづくり」の取組みで大きな成果をあげています。

今回、この事業を企画推進されている岩手県紫波町企画課の佐々木琢磨様、そして「紫波型エコハウス」の開発事業を指導してこられた東北芸術工科大学教授の竹内昌義様を迎えて、県内の幅広い住宅関係者を対象に、循環型社会の構築とこれからの省エネ住宅（エコハウス）の推進を検討するシンポジウムを開催しました。

2 シンポジウムの開催概要

1月16日(火)午後2時から富山県民会館で開催し、最初に富山県木造住宅生産体制強化推進協議会の松田昇会長が挨拶を行い、引続き「紫波型エコハウスの取組みと今日までの歩み」として、佐々木様から町が進めてきた循環型まちづくり、協働のまちづくり、公民連携によるまちづくりについて、有名なオガールプロジェクトの取組み経過を中心に講演がありました。

そして改正法で定めた基準よりはるかに高い水準の「紫波型エコハウス」の開発と現状について、地元工務店の対応や順調ではなかったことも含めて話があり、最後は今後の町の発展に希望が見える内容でした。ここに至ったのは、首長の素晴らしいビジョンとそれを理解し実行する職員、応援を求めた外部ブレーンの連携・協力の賜物であり、地方の一市町村でもここまでできるのかと感心させられました。



その後、外部ブレーンで紫波型エコハウスの開発・指導にあたった竹内様より「木の循環でキャッシュアウトをなくすと地方は元気になる」と題して講演があり、日本のCO2排出削減の国際公約を踏まえて、省エネルギー、そしてエ

コハウス推進の必要性を先進のヨーロッパでの多様な具体例と、遅れている日本の課題・対応についてデータ・写真により説明がありました。

また、紫波町での森(町産木材)を中心にした効率的で環境にやさしい、町民が潤う循環型まちづくり、特に紫波型エコハウス・エコタウンの取組みについて、事業着手からこれまでの主要な検討課題について、先生の各地での経験や専門家仲間の活用を含めて話がありました。

基調講演のあと、「エコハウスと循環型社会を目指して」と題してパネルディスカッションとなり、建築士会の加藤明博常務理事がコーディネータを務め、パネラーは基調講演の両講師の他、設計の立場から水野建築研究所の水野桂子様、施工の立場から優良住宅協会会長の安田信夫様、木材・林産の立場から岸田木材(株)の岸田毅様の6人で行なわれました。



最初に県内パネラーからテーマに関して、自身の経験を踏まえて発言があり、岸田様からは本県の林産業や県産木材についての厳しい状況と今後の期待について熱く語られ、水野様は設計では省エネはもはや必然の課題として取り組んでいるが、県産木材については供給面での努力が必要とのことだった。安田様は、施工者としてどこに重点を置きどのレベルの住宅を供給するかは建築主との協議となり、省エネレベルの向上は関心が高いが、県産材の活用は現状では利用範囲が限られているとのことでした。

両講師からはその都度、紫波町あるいは他県・外国の事例を踏まえて、助言がありました。

最後に竹内先生始め各パネラーから発言があり、纏めとして加藤コーディネータから省エネルギー化の意義を改めて考え、建築住宅関係者そして富山県のエコハウスに対する取組みの進展と県産木材の利用促進に向けての努力を期待してパネルディスカッションは終了しました。

今回は100人を越える参加者があり、最後の質疑応答も時間オーバーとなる熱心なシンポジウムとなり、初期の目的は十分果たせたと思っています。